ことばらんど賞
小山あまね「歯車牛乳」

歯車牛乳

町田第五小学校　六年　　小山（こやま）　あまね

歯車牛乳が発売されたのは今からちょうど半年前のことだ。歯車牛乳といっても、歯車乳業が作っている牛乳でもなければ、歯車でできている牛乳でもない。これを説明するには更に二年前に遡る。それはニュースで発表された。「私達の心には歯車があります。」歯車というものは、私達の心を動かすもの。この歯車がうまく動かないと私達の調子も悪くなる。その調子を整えるのが歯車牛乳なのだ。そんな歯車牛乳は「一日一杯歯車牛乳！」のキャッチフレーズでまたたくまに売れていった。「これが歯車牛乳か。」中学二年生の由美子が歯車牛乳を手にとったのは発売から半年後のことだった。発売直後こそ品薄だった歯車牛乳だが、発売から半年も経つとコンビニの店頭で見かけるようになった。テストもあるし、普通の牛乳と同じ値段ならと由美子は歯車牛乳を購入した。次の日、歯車牛乳の効果はすぐに表れた。テストは由美子の苦手な数字だったというのに、スラスラと解けるのだ。応用問題は時間ギリギリで解けなかったものの、単純な計算問題などはほとんど解くことができた。（すごい。こんなに問題が解けるなんて！）その日から、由美子は毎日歯車牛乳を一杯飲むようになった。大事なテストがある日、音楽や体育の発表があるとき。歯車牛乳はいつも予想以上の効果を発揮した。２月14日の朝、由美子は二杯分の歯車牛乳を飲んだ。何といっても今日は、由美子にとって一世一代の告白のチャンスなのだ。じつは、由美子は同級生の健一に片思いをしていた。なかなか告白する勇気が出ず悩んでいた由美子に訪れたのが今日、バレンタインだった。（絶対に告白を成功させてみせる！）昨日から用意していたチョコをバックに入れ、由美子は学校へと向かっていった。学校に着くと、由美子はある違和感を感じた。（私、なんで健一に告白しようとしたんだっけ？）健一はほかの男子とは違い、物静かであまり活発な方ではなかった。同級生は、陰キャだよーと避けていたが、由美子はむしろそこが良かったのだ。すぐにからかったり、いたずらする男子と違って、落ちついていて頭もいい健一は理想、のハズだった。今落ちついて考えてみても、健一と由美子は趣味が合わない。付き合えたとしても別れてしまうかもしれない。（私って本当に健一が好きだったのかな？）健一を好きだった由美子の気持ちは、すっかりなくなってしまった。もちろんチョコを渡す相手もいなくなる。（このチョコどうしようかな）「あ！」思わず声に出た。由美子の頭に思い浮かんだのは、同級生である陽太の顔だった。陽太はいつも由美子にアピールをしてくる。教室で「好きです！」と急に告白し

ことばらんど賞
小山あまね「歯車牛乳」

てきたり、突然花束を持ってきたりとアピールの方法は様々だったが、どれも過剰なものであり由美子はうんざりしていた。（でもそれって一途ってことだよね）自分のために様々なことをしてくれるというのは由美子にとってもうれしいことである。さらに二人はしゅみが合う。（そういえば、今日は陽太がアピールにこないな）不思議に思いながらも、由美子はチョコの入った箱に書かれた名前を「陽太」に書きかえて、バックに入れ直した。放課後、由美子は陽太を校舎裏に呼び出した。もちろん告白のためにだ。バックからチョコを取り出し、由美子は口を開いた。「好きです！付き合ってください！」普段通りならすぐさまＯＫという言葉が聞こえただろう。だがしかし陽太の口から出てきたのは、それとは全く別の言葉だった。「ごめん、他に好きな子がいるんだ。気持ちだけ受け取るよ。」由美子のチョコを受け取って、陽太は去っていった。由美子は、暫くの間呆然としていた。次の日、由美子は一人、部屋で考えていた。もちろん昨日のことである。由美子は朝起きるとまるで昨日のことが嘘だったかのように気持ちが変わっていた。また、健一のことが好きになっていたのだ。すごく不思議な現象だったが、きっとバレンタインで緊張していたのだろうと由美子は結論づけた。だが、本当の原因は歯車牛乳にあった。実はこれには、二杯以上飲むと心の歯車が狂ってしまい、普段の気持ちも逆になるという副作用があったのだ。（また、次のバレンタインで頑張るかぁ）由美子は早くも、来年のバレンタインに向けて計画を立て始めた。一方その頃、陽太も一人頭を抱えていた。「なんで告白断っちゃったんだろう…」何度も由美子にアピールしてきた陽太だが、昨日はなぜか同級生の実香に惹かれたのだ。告白されたときも実香のことを考えていて、つい断ってしまった。（本当になんでだろう、バレンタインだから張り切って歯車牛乳を二杯も飲んだっていうのに）

審査員講評 ****************************

タイトルを見た瞬間から興味を惹かれる「歯車」と「牛乳」という言葉の組み合わせ、またその効能の設定がとてもユニークでした。心の歯車がうまく動いた時の描写や、ストーリーの運び方など丁寧で、とても楽しく読むことができました。

—— KEN THE 390